湊小

主体的に学び合う子どもの育成

～子どもの「見方・考え方」を働かせる授業づくりの工夫を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　音　喜　多　　勧

１　研究主題について

本校は、昨年度、「自分の考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成」を研究主題とし、教科を４教科（国語・社会・算数・理科）に広げて、「話す・聞く」ことや「練り合い」を中心に、言語活動のさらなる充実を図りながら、次のような手立てを工夫した。

〇基礎・基本のさらなる定着
〇自分の考えたことを表現させる方法
〇問題解決のための交流の場の設定

その成果として次のようなことが挙げられる。

・導入で、模型や図、写真や作品などを提示し、視覚的に捉えさせたことにより、主体的に問題解決に取り組むことができるようになった。
・ペア・３～４人グループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を多く設定することにより、関わり合うことへの抵抗感が少なくなり、活発に意見交換や学び合いができる児童が増えた。
・説明の仕方の見本や話型を提示し、繰り返し話す練習をさせたことで、説明する力がついてきた。また、友達の意見に対して、聞いてそれを受けて自分の考えを話すこともできるようになった。

その一方で、友達の意見に対して、どの部分が大事なのか判断できない児童が多い。自分の考えと比べたり友達の考えを理解しながら聞いたりする力は、さらに指導が必要である。また、自分の考えを組み立てて話すことが難しいため、今後も、話型の提示や提示されたキーワードを使って話すなど繰り返し取り組んでいく必要がある。

そこで、前年度までの成果と課題を踏まえ、さらに基礎学力の向上を図りながら、話す力・聞く力、伝え合う力をつけていくことが大切と考える。今年度は、国語科を中心に、課題提示や発問の工夫と既習事項や教科の学習用語を使って、考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を働かせる授業づくりの工夫を実践することによって、基礎的な知識・技能が身に付き、「主体的に学び合う子ども」を育成することができると考え、本研究主題を設定した。

２　研究のねらい

主体的に学び合う子どもを育成するために、導入から課題設定までの教師のはたらきかけや、考えの根拠となる「見方・考え方」を働かせる授業づくりを工夫することによって、児童の自ら考える力や表現する力が高まることを授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

課題提示の工夫と既習事項や教科の学習用語を使って、考えの根拠となる確かな「見方・考え方」を働かせ、伝え合ったり話し合ったりする活動を工夫することにより、基礎的な知識・技能が身に付き、主体的に学び合う子どもを育成することができる。

４　研究内容

(1)児童が主体的に問題解決に取り組むようにするための工夫
　ア　必要感のある「問い」をもたせる手立て
　　①課題提示の工夫（教材や発問等のしかけ）
　　②発問・指示の吟味
(2)児童同士が積極的に関わる学び合いができるようにするための工夫
　ア　課題解決に向けての話合いの工夫
　　①学習用語の定着と「見方・考え方」を鍛える
　　②自分の考えを書いて話す
　　③既習事項（用語、本文からの引用等）や経験を生かして話す
　イ　振り返り・評価を生かした学びの工夫
　　①振り返りの視点の明確化（学びの成果等）
　　②振り返りの活用（変容から次の意欲につなげる、新しい問いを次時に活用）

③理由や根拠を明確にして説明する

(3)日常における「話す・聞く」力をつける実践の工夫

ア　何でも話せる雰囲気・土台づくりの実践

①場の設定の工夫（各教科、朝の会や帰りの会、学級活動等）

②話型の掲示

イ　語彙の量を増やすための日常の実践の工夫

5　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・題材名	授業者・指導助言者	主な内容
7	5	第１回授業研究 ３学年 国語 「仕事の工夫、 見つけたよ」	教諭　木村　佳憲	朝市に出店している人の仕事の工夫について、調べたことを報告する文章の組み立てを「人・時間・商品」というキーワードを使いながら付箋を用いて話し合わせた。文章の組み立てについてキーワードにそって分類していた。
11	29	第２回授業研究 ６学年 国語 「『鳥獣戯画』を読む」	教諭　中村　真澄	６枚のセンテンスカードを２種類に分類させ、「見方・考え方」を働かせるようにした。１つの段落に絞り、評価ありの文章と評価なしの文章を比較させ、評価が入っていることのよさに気付かせていた。

(2)一般研修

月	日	内　　容	
6	28	AED 講習会	講　師：トスネット
8	21	絵の鑑賞会（描画指導法・絵の審査）	講　師：本校図工部
9	6	体育授業研修会	講　師：本校　　校長　音喜多　勧
2	14	特別支援教育研修会授業公開	授業者：あおば学級担任　教諭　工藤　晶恵 なぎさ学級担任　講師　今村　直子

6　研究の成果

(1)導入で、センテンスカードの分類やキーワードを使って、項目ごとに分けた文例とそうでない文例を比較させるなど、提示の仕方を工夫することで、考えの根拠となる「見方・考え方」を働かせることができ、主体的に問題解決に取り組むことができるようになった。

(2)ペアやグループなど、授業のねらいに応じて話合いの場を多く設定し、話合いが明確になるように視点やキーワード等を提示することにより、活発に意見交換や学び合いをできる児童が増えた。

(3)話合いの仕方などの話型を提示し、困ったときにそれを見て確認しながら話すことで、説明する力がついてきた。また、友達の意見を聞いてそれを受けて自分の考えを話すこともできるようになった。

7　研究の課題

(1)前時の学習内容であっても、既習事項や経験したことを児童から引き出すのに時間がかかることが多い。課題提示であまり時間をかけないようにすると、その中で必要感をもたせることが難しいことがあった。そこで、前時の振り返りでさらに調べたいことや疑問を引き出したり、単元の初めに解決する必要感をもたせたりするしかけや発問の工夫等をしていく必要がある。

(2)後の学習につながるような疑問や自分の考えの変容に迫るような振り返りが書けるように、キーワードや視点を与え具体的に指導してきたが、個人差が大きいといえる。課題解決に向けての話合いでは、自分の考えと比べたり友達の考えを理解しながら聞いたりする力は、さらに指導が必要である。また、自分の考えを組み立てて話すことが難しいため、今後も、話型の提示や提示されたキーワードを使って話すなど繰り返し取り組んでいく必要がある。

（記入者　　中川　彩子）